

教育研究創発国際研修における学術活動報告書

令和 5 年 12 月 1 日

氏名 下村 寛治

所属 身体教育学 コース

指導教員名 森田 賢治

1. 研究課題 楽観性の個人内変動と抑うつとの関連の検討

2. 報告する学術活動の実施期間 令和 5 年 4 月 1 日 ~ 令和 5 年 12 月 31 日

3. 日本学術振興会特別研究員 (DC) の現在の採用状況 DC1 DC2 採用無し

4. 学術活動

- 国外 国内
- ①英語論文公表
- ②研究科教員の研究プロジェクト参加
- ③フィールドワーク
- ④国際会議 (研究発表 運営補助 出席のみ)
- ⑤研究会 (研究発表 運営補助 出席のみ)
- ⑥研究指導委託
- ⑦留学
- ⑧国際研修
- ⑨国際インターンシップ
- ⑩その他 (具体的に:)

5. 学術活動実施の概要

※上記4で選択した学術活動について具体的に記載してください。括弧内の概要を必ず記載してください。

- ① 英語論文公表
(著者、発表論文名、掲載誌名等、発表年月巻号、発表年月日等、論文内容の概要)
- ② 研究科教員の研究プロジェクト参加
(プロジェクト名、代表研究者名、自身の具体的な活動、活動期間(年月日)及び活動頻度、プロジェクトの概要)
- ③ フィールドワーク
(調査先機関等、国名・都市名、具体的な活動、活動期間(年月日)及び活動頻度、調査先の概要)
- ④ 国際会議
(研究発表・運営補助・出席のみ の別、学会・会議名、国名・都市名、発表題目名、発表形式(口頭・ポスター等)、発表年月日、発表内容等の概要)
- ⑤ 研究会
(研究発表・運営補助・出席のみ の別、研究会名、国名・都市名、発表題目名、発表形式(口頭・ポスター等)、発表年月日、発表内容等の概要)
- ⑥ 研究指導委託
(派遣先機関、国名・都市名、受入身分及び研究、研究テーマと受入教員、受入期間(年月日)、具体的な研究活動、研究発表内容等の概要)
- ⑦ 留学
(派遣先機関、国名・都市名、受入身分及び研究科、受入期間(年月日)、具体的な履修状況、研究発表内容等の概要)
- ⑧ 国際研修
(プログラム名、派遣先機関、国・都市名、派遣期間(年月日)、プログラム概要、研究発表内容等の概要)
- ⑨ 国際インターンシップ
(プログラム名、派遣先機関、配属部署、国・都市名、派遣期間(年月日)、具体的な活動、プログラム内容等の概要)
- ⑩ その他(具体的な活動、活動期間(年月日)及び活動頻度等の概要)

学術活動区分 (①～⑩を記入)	①
<p>状態楽観性 (state optimism) を測定する尺度である State Optimism Measure (SOM; Millstein et al., 2019) の日本語版を作成し、その妥当性を確認するとともに、状態楽観性の縦断的な性質を明らかにする内容の論文を執筆し、当該論文が国際誌 Affective Science に受理され、公開された。</p>	

- (注) ① 年月日は西暦で記入してください。
 ② 英語論文発表については報告する学術活動において発表又は受理されたもの。
 ③ 上記に記載しきれない場合は、ページを追加しても差し支えありません。
 ④ 複数回の学術研究活動による報告の場合、適宜本ページを追加し、2つ目以降についても必要な内容を網羅してください。

6. 学術活動による成果

※報告する学術活動について、教育分野における国際的リーダー人材の育成とその研究成果を海外に発信することを目的とした教育研究創発国際研修の趣旨に照らし、その成果を具体的に記載してください。学術活動により得られた自身の研究課題につながる成果についてもわかるように記載してください。

※本欄に書ききれない場合、ページを追加しても差し支えありません。

【学術活動による成果】

本学術活動では、状態楽観性を測定する尺度 State Optimism Measure (SOM; Millstein et al., 2019) の日本語版である J-SOM を開発し、その妥当性を検討しつつ状態楽観性の縦断的な性質を検討した研究内容について、国際誌 *Affective Science* にて発表した。

状態楽観性とは、個人の中で時間的に変動すると想定される側面に着目した楽観性のことである。状態楽観性の性質を検討するためには縦断的な（同一個人に対して複数回の）調査が必須となる。しかし現時点で SOM を用いた縦断研究は 1 つしか存在せず、個人内で日常生活下において本当に状態楽観性が変化を見せるのか、見せるとすればどの程度の時間スケールでどの程度の大きさなのかは不明であった。そこで私は日本語版の尺度である J-SOM を開発し、それを用いて縦断調査を行うことで、J-SOM の妥当性を検討しつつ、状態楽観性の個人内変動の詳細について検討した。その結果、(1)J-SOM が十分な妥当性を有していること、および(2)状態楽観性が日常生活下の個人内で数週間という時間スケールで変動を見せること、を明らかにすることができた。

状態楽観性を測定する日本語の尺度を開発できたことにより、今後、状態楽観性の性質についての文化差を検討することが可能になる。特性楽観性については特に東アジアと西欧との文化差の存在が報告されているが、状態楽観性についてはそもそもまだアメリカ人を対象とした研究しか実施されておらず、文化差の有無すら明らかではない。今後は開発した尺度を用いて日本と英語圏での文化差を検討できる。

また、楽観性が特別な介入なしに数週間というスパンで個人内変動を示すことを明らかにできたことにより、「楽観性は変動しうるものである」という想定の下で今後の楽観性についての研究が実施されることは大きな意義を持つと考えている。楽観性は様々な健康指標を予測することが膨大な数の研究で示されているが、その具体的なメカニズム（いかにして楽観性が健康に寄与するのか）は明らかになっていない。楽観性が時間的に個人内で変動するという想定を持つことで、楽観性と健康指標との時間的な相互作用を検討することが可能になり、ゆえに今回の成果は楽観性と健康指標との関連のメカニズムのより詳細な理解を促すものであると考えている。

【自身の研究課題につながる成果】

私の研究課題は、楽観性の個人内変動と抑うつとの関連を明らかにすることである。それにあたって、具体的には、状態楽観性、学習におけるバイアス、抑うつ気分という 3 つの要素の経時的関連を検討することを計画している。今回状態楽観性を測定する日本語の尺度を開発できたことで、今後この計画を実施することが可能となった。また、状態楽観性が 2 週間程度で十分な個人内変動を示すことを明らかにできたことで、この計画を実際に実施するにあたっては、2 週間程度の間隔で縦断調査・縦断実験を行えば良いという目安を得ることができた。